

学者でも医師でもなく、当事者で自分たちを研究する。当事者どうしだから、やれる。そうすることで自分の弱さを公開することができます。「そーね」と肯定してくれる。相手を思い付いたり「みんなも似たようなものだつたんだ」と安心できる。

これは豊中市で活動するNPO法人「そーね」サンから教えてもらったコトバです。そーねサンは、なぜ、自分はこうなってしもうのかと自分たちで自身の性質を研究する試みをしているのだそうです。

ある勉強会で「べきモノサシ」というコトバを聞きました。時間は守るベキ、男は（女は）こうあるベキ、朝は早く起きるベキ、大人は働くベキ、政治家はクリーンであるベキ、若い人は元気であるベキ……。このべきモノサシを自分自身に当ててしまっている人に、それって本当に必要ですか？と問うことで苦しみが和らぐかもしれません」という考えです。

私も、興味深いコトバの話です。定期的に勉強会に参加させて頂いている岡山で、長年地域医療に関わる医師が、「患者や病気、症状を“対象化”するとうまいかないと思う」と優しい口調で話されました。

「対象化」と“共に感”

もやもやした事柄を、わかりやすい一つのコトバに表現する。そこにセンスと思いやりがあるあたたかさを感じます。生活の中で何かうまくいかないことがあつたら「それ、研究しようか」が合言葉になると、前向きになれますね。ひきこもりに関する取り組みは、精神科訪問看護との共通点を感じます。

そういう試みの中でいくつかのコトバがつくられたそうです。べきモノサシもそのひとつ。そこから「べき崩し」といえれば他の参加者が失敗すること、カチコチの緊張から解放されることがあります。その人の失敗が一つの「べき崩し」となって失敗した人も感謝されます。これらを応用することで生きにくさがぐっと改善すると思うのです。

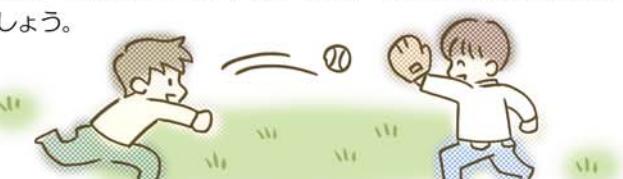
しかし半世紀以上患者を支えてきたその医師は「患者を患者扱いするのではなく、つまり対象化するのではなくて、」共に感“を大切にして関わっていくことで、人は癒されるし回復していくのだと思う。と説明してくださいました。これはつまり人間を人間扱いするということです。



Q：キャッチボールに付き合ってくれますか？

A：もちろん！ぜひやりましょう

訪問看護は原則その方の家ですが、公園でキャッチボールなんていいじゃないですか。でもケガには注意しましょう。



お知らせ
4コマ漫画
新ストーリーWeb更新！

ハントンの四コマ漫画、とても好評を頂いております。今回は、精神科未経験の猫田さんがハントンに見学実習に来たという設定です。

ゆっくり更新していきます。お楽しみに！